

高野口のピイル織物

高野口地域では、100年以上にわたってピイル織物が生産されてきました。地元の織工が使う技術は、もともとヨーロッパで普及したものでした。織物のパイオニアである前田安助は、1877年に輸入された見本を見掛け、縦糸と横糸の精巧な模様を作り出す方法を編み出しました。

前田安助が見本から作り方を推測して考案した再織（二重シェニール織）を生産する方法は、織られた布地を糸状に裁断し、それを再び新しい生地に織り上げるというものです。ぽこぽことした肌触りのこの生地を現在でも作っているのは和歌山県にある1軒の工場だけです。再織は小さなタオルの生地として、とりわけもとのヨーロッパのピイル織物のデザインから着想を得たレトロな花柄のものが大変好まれています。

ピイル織では、より糸の小さな輪または房ができるため、柔らかく弾力性の高い生地になります。この技術は、本物のようなフェイクファーや、一部の新幹線の座席の装材を製造するためにも用いられています。